博士学位論文審査要旨

２０２１年1月７日

論 文 題 目：　ヒューム『人間本性論』における「知覚」的世界の自然主義的再構成
——印象と観念の差異としての「生気」にかんする因果的解釈を軸として——

学位申請者：　大槻　晃右

審 査 委 員：

主　査：　文学研究科　教授　新　　茂之

副　査：　文学研究科　教授　林　　克樹

副　査：　関西学院大学大学院文学研究科　教授　久米　暁

要　　旨：

本論文のねらいは、古典的な英国経験論を代表するデイヴィッド・ヒュームの主著『人間本性論』に照準を定めて、印象と観念の差異に着眼しながら、ヒュームが描きだそうとしている知覚的世界の実相を抉りだすところにある。

本論文は、まず、印象と観念の区別を踏まえて、諸知覚のあいだに成立している関係を、諸知覚からなる複合的全体として定位する。そのうえで、本論文は、ヒュームの立ち位置から、関係の知覚への道を拓こうとする。この立論に基づいて、次に、本論文は、ある知覚から別の知覚に精神が推移していくという事態を推論とみなして、特定の推移に精神が方向づけられているという精神の被決定を印象として定位する。このようにして、本論文は、原因と結果の必然的結合の知覚を、知覚的推移という関係的事態の知覚に求める。本論文に従えば、原因と結果の必然的連関を与える精神の被決定は、知覚間の恒常的随伴の反復的累積が形成する習慣的規則性である。

こうした考察を展開して、本論文は、生気という概念の解明に向かう。すなわち、特定の知覚が備える生気は、それと関連する情念と想像のほうに精神を安定的に推移させていく因果的な力能である。この理解を手がかりに、本論文は、最後に、真理の問題に目を向ける。というのも、懐疑主義的局面を持つヒュームにとって、それを避けては通れないからである。実在は、生気のある、堅固で安定性をもった知覚であり、ヒュームにあっては、信念は、そのような知覚と一致しているときに、真理になる。しかも、そのような真理は、探究の脈絡に依存する。探究という人間的営為は、生気のある知覚が産生させる情念から始まり、実在という、生気ある知覚との脈絡的な合致を果たしている信念に到達したときにようやく終結する知覚的推移の動態である。

確かに、本論文には、ヒュームの主張にかんする包括的な理解を強化すべきところがある。しかし、本論文は、先行の研究を精査し、その問題点を摘出しながら、ヒュームの言説に基づいて、ヒュームの思想にかんする、新たな自然主義的理解を提起しようとしている。よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０２１年1月７日

論 文 題 目：　ヒューム『人間本性論』における「知覚」的世界の自然主義的再構成
——印象と観念の差異としての「生気」にかんする因果的解釈を軸として——

学位申請者：　大槻　晃右

審 査 委 員：

主　査：　文学研究科　教授　新　　茂之

副　査：　文学研究科　教授　林　　克樹

副　査：　関西学院大学大学院文学研究科　教授　久米　暁

要　　旨：

上記審査委員３名は、２０２１年１月６日、午後５時から約２時間にわたり、Zoom 会議室を活用し、遠隔で学位申請者にたいして口頭試問を行なった。

学位申請者は、各審査委員からの質疑にたいして、提出論文にかんする哲学の専門的な知識はもとより、心理学を始め、関連する諸分野の主題とか問題とかについても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値と学力の水準の高さがともに証明された。

口頭試問のまえに実施した語学（英語・独語）試験においても、課題として提示した英文と独文を精確に読解し、十分な語学力を備えていることが確認された。

よって、本論文にかんする総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： ヒューム『人間本性論』における「知覚」的世界の自然主義的再構成
——印象と観念の差異としての「生気」にかんする因果的解釈を軸として——

氏　　名： 大槻　晃右

要　　旨：

本論考の目的は、デイヴィッド・ヒューム(David Hume, 1711-76)の哲学的探究の基底にある「知覚」(perception)的世界の実相を、印象(impression)と観念(idea)との差異としての「生気」(liveliness)にかんする因果的解釈を軸として解明し、ヒュームの哲学の基本的枠組みを闡明するところにある。

ヒュームは、因果の認識、物体の存在、人格の同一性、懐疑的議論の実際的効力、理性と情念の関係、道徳的区別の起源といった多方面にわたる論点で、現代にまで及ぶ影響を与えてきた。しかし同時に、そうした諸論点でヒュームが実際に何を言おうとしていたのか、詳しく立ち入ってみれば、それを確定するのは容易ではない。個々の主題についてのヒュームの議論の趣意を適切に把握するためには、各々の論述を精査するだけでなく、ヒュームの哲学全体の枠組みのなかにそれぞれの立論を位置付ける必要がある。

ところが、ヒュームの哲学の基本的な立場がどこにあるのか、それ自体が単純な決定を許さない問題である。とりわけ、ヒューム研究の歴史を見渡すとき、解釈上の大きな争点となってきたのは、ヒュームの哲学全体に通底する二つの要素の関係である。その二つとはすなわち、懐疑主義と自然主義である。この両者をヒュームの哲学のなかでどのように位置付け、両者の連関をどのように捉えるのか、これがヒューム解釈にあたって避けて通れない課題となってきた。一方では、ヒュームをもっぱら懐疑主義者と見なす理解がある。しかし他方では、ヒュームは自然主義者として、人間にかんする科学的な理解に基づく諸学問の体系を構築しようとしている、という見方がある。一部の研究者たちは、ヒュームは自然主義者であると同時に懐疑主義者である、と考える。

本論考は、この最後の流れと方向性を共有しつつ、しかしヒュームの信念の理論に焦点を当てる。というのも、ヒュームが自然主義と懐疑主義とを同時に採用できるようにしているのは、信念についてのヒュームの考え方であるからである。ところが、信念とは何であるのか、という問題に対するヒュームの考えは、現代にあって厳しい非難の的になってきた。そうした否定的態度の背景には、批判者たちがヒュームに帰属させている近代の観念説(theory of ideas)では、信念の実際の在りようを不十分にしか取り扱えない、という想定がある。批判者たちの考えでは、ヒュームはロックから観念説を無批判に受け継いでおり、しかも観念説は、わたしたちの精神の働きを、互いに関係を持たないさまざまな諸観念が心の前に現れては消えていく、という着想のもとで捉える。そこで、このような枠組みにあっては、信念を抱くこともけっきょく「生き生きとした観念」(T 1.3.7.5)という、たんにある特殊な性質を持つ観念を眺めることにすぎない。信念についてのこのような理解では、ある信念と別の信念との連関とか信念と行為との結び付きを説明したり、信念の真偽を吟味するような営みを説明したりすることはできない。そのように考えられているのである。

しかしながら、こうした見立ては本当に妥当であろうか。事態はそう単純ではないことは、次のような点に目を向ければ判るであろう。たとえば、ヒュームはそもそも、ロックとは違って、

「観念」という言葉を精神に現れるすべての事象に対しては用いない。ヒュームは、わたしたちの精神が持つすべての対象を「知覚」としたうえで、知覚に備わる「生気」の程度の強弱によって、知覚を「印象」と「観念」に分けるのである(T 1.1.1.1)。この分類の仕方は、ヒュームが意識的に導入したものであり、そこには、ロック的な観念説に対しての批判的態度が現れている。このような点を考慮すれば、わたしたちは、従前の研究がしてきたようにヒュームの観念説をロック以来のそれとただ同一視して非難すべきではないし、信念にかんするヒュームの説明についても同様である。わたしたちは、ヒューム的な観念説、あるいはむしろかれの「知覚」の理論に内在的に、それに独自の含意を抉り出す必要がある。

そのときに、本論考が導きの糸とするのは、ヒュームの次の言説である。信念は、「わたしたちにとって実在を虚構よりもいっそう在り在りとさせ、実在が思考の中でいっそう重きをなすようにさせ、情念と想像に対する優った影響を実在に与える、精神の働き」(T 1.3.7.7)である、と。この文言は、信念が「思い浮かべることの力と活気」にある、というヒュームの主張を、批判者たちが想定するのとは異なる仕方で解釈する方途を示してくれている。すなわち、当の言明に従えば、ヒュームは、信念を、それの持つ、情念とか想像とかへの因果的な機能の差異によって説明している。言い換えれば、何かを信じていることと、たんにその事柄についての考えを持っていることは、それぞれが「知覚」的世界のなかで果たす役割のゆえに区別される。しかも、ヒュームが信念を特徴付ける「力と活気」は、もともと、印象と観念という、「知覚」のもっとも基本的な二つの種類を区別するために、かれが導入したものであった(T 1.1.1.1)。そうであるとすれば、信念と単なる考えとを機能的差異によって分けるのと同じ発想が、ヒュームの「知覚」理論全体に行き渡っていると考えられるのである。

ここから浮かび上がってくるのは、次のような視座である。すなわち、ヒュームはけっして、精神の個々の働きを単離しては考えておらず、むしろ、その他の知覚との動態的な連関のなかで、それぞれの働きを位置付けようとしている。本論考は、全体として、この見通しの正当性を確証し、その含意を展開して、ヒュームの「知覚」の理論の基礎的構造およびそこからの諸帰結を解明することを目指す。それに従い、本論考ではつぎのように論究を進める。

最初に序章では、今しがた述べたような本論考の方針を、ヒュームの哲学についての解釈史を辿りながら、かれの哲学の基調にある自然主義と懐疑主義との絡み合いと、両者の連関にあっての信念の理論の重要性に焦点を当てて、説明する。

第１章では、「知覚」的世界が一般的に備えている基礎的な構造を浮き彫りにして、印象と観念の差異としての「生気」を因果的な機能の点から把捉するための前提を整備する。伝統的に、ヒュームは、「知覚」を原子論的に考えており、それゆえ、かれの「知覚」理論は関係的事態および関係の知覚に適切な記述を与えられない、とされてきた。第１章ではこの主張の妥当性を検討し、通説に反して、ヒュームの「知覚」理論には関係の知覚を容れる余地のあること、むしろかれの「知覚」理論の出発点は関係し合う諸知覚の複合的全体であることを証示する。

続いて第２章では、ヒュームにあっての因果的関係の知覚の実相を究明する。通説ではしばしば、ヒュームは因果の知覚を否定していると考えられてきた。けれども、ヒュームは、因果関係の要をなす必然的結合の観念の起源として、「精神の被決定」という印象を指定している。とはいえ、この「精神の被決定」の印象にかんしては、それを認めることがヒュームの因果論と本当に整合的であるのかどうかを含めて、いまだに確定した解釈が成立していない。そこで、第２章では、「精神の被決定性」の感じについてのヒュームの言説を精査し、結果として、当の感じがヒュームの因果論と整合的に、一定の規則に従ってある対象の知覚から別の対象の観念へと思考が推移するという関係的事態の知覚として把握できることを明らかにする。

以上の立論を踏まえて、第３章で、印象と観念、信念と単なる考えとの差異を形作っている、「生気」の内実を精確に定式化する。知覚の生気は、ヒュームがそれを「鮮明さ(vividness)」(T 1.3.9.17)と言い換えたりしているという事情から、多くの場合、何らかの現象的性質の程度を指

していると見なされてきた。本論考は、このような一般的見解に反して、ヒュームの言う「生気」を因果的機能として捉えるという解釈を擁護する。「生気」にかんするこの見立てと、因果的関係の感知を恒常的随伴の観取に基づけるヒュームの因果論から、次のことが帰結する。すなわち、わたしたちは、その都度の状況のなかで安定性を持ちわたしたちの情念とか想像に働きかけ続ける知覚を、生気あるものとして、それゆえ実際の感受を示す知覚として把握する、ということである。

第４章では、「生気」についてのこの解釈に準拠して、観念の表象性の内実と、観念の真偽の意味を明らかにする。ヒュームの哲学の基底にある自然主義的な探究と懐疑主義的態度との関係を適切に捉えようとするとき、ヒュームにあって真理とは何であるのかを明確にしておくことは欠かせない。というのも、懐疑主義が示すのは、わたしたちの持つ信念は真理には到達していないかもしれない、という疑念であるからである。それでは、「生気」についての本論考での考察に則るとき、信念と真理との関係との実相はどのように理解できるのか。第４章は、この問題を、表象としての観念の実在との一致、というヒュームの真理概念に即して究明する。結果として明らかになるのは次のことである。すなわち、ヒュームにあって、どの信念が、実在として探究の背景となり、あるいは他方でその真偽を探究されるかは、わたしたちの関心に照らして浮かび上がってくるのであり、ヒュームにあって真理は探究の脈絡に依存する。

最後に終章では、まず、以上の論究の要点を簡潔にまとめたうえで、本論考を通じて明らかになったヒュームの信念論から帰結する含意を展開し、本論考の解釈の持つ哲学的意義を明確にする。